

き じょうそん こ ふん

木城村古墳27号・60号 横穴墓

— 宮崎県児湯郡木城町所在の古墳時代の横穴墓 —

2000年

宮崎県埋蔵文化財センター

序

この報告書は、宮崎県教育委員会が、県道都農綾線道路改良工事に伴い平成6年度に発掘調査を実施した、木城町所在の「木城村古墳27号および60号横穴墓」の調査の記録であります。

調査により、27号横穴墓では、副葬された土器類や刀・剣・鉄鏃などの鉄器類が出土するとともに、墓前祭祀の痕跡が確認されました。また、調査中に発見された60号では、奥壁に線刻画が発見されました。これらの成果は、7世紀の墳墓のあり方や当時の人々の精神世界を知る上で貴重な資料となることでしょう。

本書が、学術資料のみならず社会教育や学校教育の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたってご協力いただいた地元の方々、および、高鍋土木事務所、木城町教育委員会、(有)久家建設の各位に厚く御礼申し上げます。

平成12年11月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 矢野剛

例　言

- 本書は、県道都農線道路改良工事に伴い、平成6年度に宮崎県教育委員会が発掘調査を実施した木城村古墳27号・60号（横穴墓）の調査報告書である。
- 木城村古墳60号は、今回の調査中に新たに発見された横穴墓であり、本来は県指定史跡の「木城村古墳」に加えるべきではないが、27号に近接しており同一墓群に属することから、現時点では便宜上、別の名称を付けずに「木城村古墳」の末尾番号に付加して「60号」としておきたい。
- 遺構の実測は、戸高眞知子（現姓竹井）が主としておこない、日高広人・飯田博之・米久田真二の各氏の協力を得た。また、遺構の写真撮影は戸高（竹井）がおこなった。
- 本書に使用した位置図（第2図）は、国土地理院発行の5万分の1図を基に作成した。
- 空中写真撮影は、株式会社スカイ・サーベイに委託した。
- 遺物の実測は、主として戸高（竹井）がおこない、一部整理作業員の協力を得た。
- 図面作成・トレース・遺物の写真撮影は、戸高（竹井）がおこなった。
- 本書の執筆・編集は、竹井（戸高）眞知子がおこなった。
- 調査の記録類と出土遺物は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

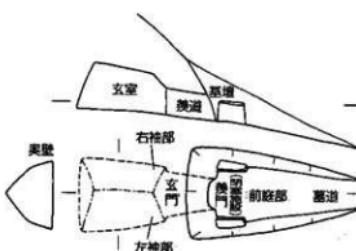
序	第7図 木城村古墳60号横穴墓奥壁線刻画	…10
Iはじめ	第8図 木城村古墳60号横穴墓実測図	…11
調査にいたる経緯		
調査の経過		
調査の組織	…2	
II遺跡の位置と環境	…3	
木城村古墳について		
小丸川流域の古墳分布と遺跡の位置		
III横穴墓の調査	…5	
27号横穴墓	…5	
60号横穴墓	…10	
IVまとめ	…11	

表目次

第1表 木城村古墳27号横穴墓	
出土鉄器計測表	…9
第2表 木城村古墳27号横穴墓	
出土土器観察表	…13

挿図目次

第1図 工事区域と横穴墓の位置	…1
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡	…2
第3図 遺跡周辺地形図	…4
第4図 木城村古墳27号横穴墓出土土器実測図	…6
第5図 木城村古墳27号横穴墓実測図	…7~8
第6図 木城村古墳27号横穴墓出土鉄器実測図	…9



横穴墓の構造と各部の名称

第Ⅰ章 はじめに

調査にいたる経緯

県高鍋土木事務所が道路改良工事を進めてきた「主要地方道県道農綾線」の木城町内路線では、本遺跡である県指定文化財「木城村古墳27号横穴墓」にかかる部分のみが工事未着手区间となっていた。改良のための拡幅工事を行った場合、法面の掘削によって横穴墓の前庭部が失われてしまうという問題があったためである。しかし、本路線の交通量が増加する中、工事完了に向けての地元の要望は強く、平成6年、横穴墓の保存と工事着手双方の方策について、高鍋土木事務所、県文化課、木城町教育委員会の三者により協議が行われた。

協議の結果、やむを得ず横穴墓の現状変更許可の手続きを経た上で工事に着手し、合わせて横穴墓の調査を実施することとなった。また、調査による記録保存に加えて、木城町教育委員会の要望もあり、調査後に保存・公開するための遺構保存の措置を講じることになり、さらに、一般見学者が昇降できるような階段等の設備を工事中に付設することも検討事項として加わった。

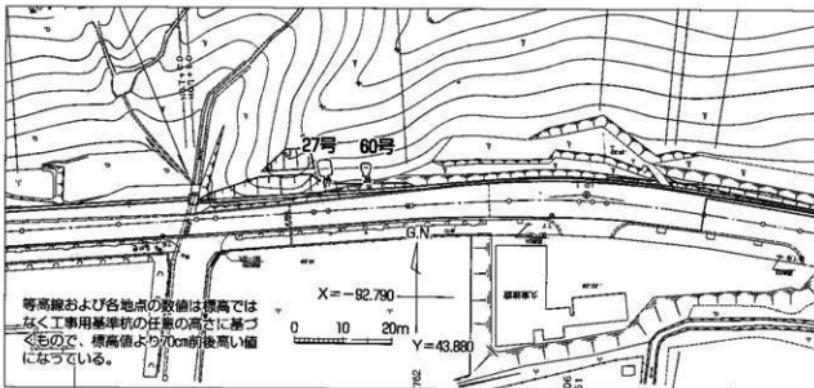
27号横穴墓の調査前の状況は、開口部から玄室上部にかけて樹木が生い茂り、その根が天井部や開口部左右に侵入し遺構を破壊しつつある状態であった。そのため、調査の安全性についての懸念もあったが、事前の検討により、直接崩落につながるような大きな亀裂等は確認されないことから、安全に十分留意しながら調査を行うことになった。

発掘調査は、平成7年1月31日から平成7年2月14日までの期間の予定で開始した。

調査の経過

発掘調査は工事と並行しながら進め、27号横穴墓の前庭部南部の掘削工事前には航空写真を撮影し、調査を終了する予定であったが、2月中旬、掘削工事中に、27号の東側法面で新たに横穴墓1基(60号)が発見された。そのため、調査を続行してこの横穴墓についても発掘調査を実施することになった。

両横穴墓の調査においては、いずれも車道に直ぐ面した位置にあるため、足場を強固にして転落を防止するなどの安全配慮や、排土の処理にも十分注意を払って作業を進めた。



第1図 工事区域と横穴墓の位置 (1:1,000)

調査終了時には、27号の前庭部を可能な限り保存するため、その周辺部分のみ法面傾斜角度を変更するとともに、両横穴とも前庭部を砂で保護した。最終的には、27号は開口したまま、60号は羨門部に土嚢を詰めて閉塞した状態にしたうえで、法面の仕上げ工事と同時に、かつ同様に、表面に金網を張った後に、植物種子混入の黒土を全面に吹き付けている。

以上の、調査に関わるすべての作業を平成7年3月20日に終了した。

なお、27号の一般見学者用の昇降設備の付設と60号の内部公開については、遺構の状態や見学者の安全面、工事上の諸条件を考慮して断念せざるを得なかった。

調査終了後の現況は、法面全体に植物が繁茂し、かなり近づかなければ横穴墓の位置を確認できない状態にある。遺構表面の物理的・生物的原因による風化は免れないが、保護面が金網・土・植物という除去可能な素材であることから、将来の再調査や遺構の保存処理等の事態には対応可能である。

調査の組織

木城村古墳27号・60号横穴墓の発掘調査は、平成6年度に以下の組織体制で実施し、平成7年度に遺物整理をおこなった。

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長 田原直廣

教育次長 八木 洋・中田 忠

調査総括 文化課長 江崎富治 同課長補佐 田中雅文 庶務係長 高山恵元

調査担当 主幹兼埋蔵文化財第一係長 岩永哲夫

主査 谷口武範（調整担当）

主任主事 戸高（現姓竹井）眞知子（調査担当）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

「木城村古墳」について

木城村古墳27号・60号横穴墓は、宮崎県の中央北東寄りにある児湯郡木城町の大字高城字岸立ての地に所在する古墳時代の墳墓である。その遺跡名称は字名に由来せず、番号も同一横穴墓群内で付された番号ではない。そのため、やや奇異な印象があるのを否めないが、それは、「木城村古墳」が昭和14(1939)年に木城村（現木城町）内で所在が確認されていた古墳59基を、地区や種類の別なく一括して県の史跡に指定したことによる。その内容は、前方後円墳3基・円墳46基、横穴墓10基となっている。これらは、大きく分けると、小丸川右岸の「百合野地区」と「陣の内地区」、同左岸の「山塚原地区」の三地区に分布のまとまりが見られる。

1996年に木城町がおこなった遺跡詳細分布調査によると、これらの古墳群内で、さらに5基の未指定古墳が確認されている。また、この他、1983年の発掘調査では、山塚原古墳群で新たに14基の円墳の周溝が、これより東へ約2kmの台地上で横穴式石室を持つ円墳1基（永山古墳）が発見されており、町内の古墳は、現存数が減少する一方で確認数は増加している。

本書で報告する木城村古墳27号横穴墓は、26・28号の2基の横穴墓（現在は位置の限定が困難になっている）とともに、「山塚原地区」東側の「岸立地区」の台地南側崖面に所在する横穴墓として県の



- 1 木城村古墳27号・60号（岸立地区 横穴墓群）
 2 永山古墳
 3 山家原古墳群
 4 川原木寄道跡
 5 木城村古墳（比木地区 横穴墓群）
 6 木城村古墳（百合野地区）
 7 木城村古墳（陣の内地区）
 8 川南古墳群
 9 持田古墳群
 10 正祐寺柿穴墓群
 11 芦原柿穴墓群
 12 山王古墳群
 13 牛牧古墳群
 14 大戸ノ口古墳群

第2図 遺跡の位置と周辺の道路（1:50,000）

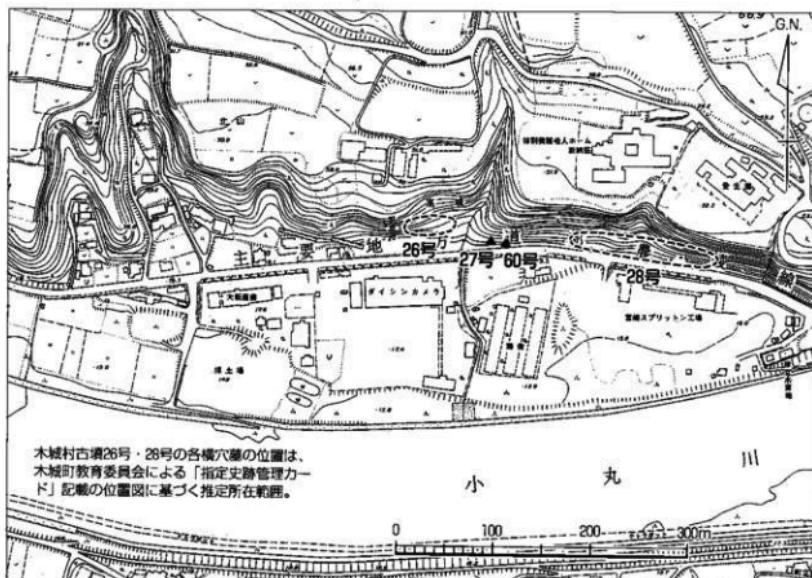
指定を受けていたものであり、今回発見された1基（60号）を合わせると、岸立地区の横穴墓群は少なくとも4基の横穴墓で構成されることになる（第3図）。

小丸川流域の古墳分布と本遺跡の位置

小丸川は、尾鈴山系に發し、日向灘に向けて東流する河川である。その左岸には標高60~70m前後の平坦な段丘台地が拡がり、最下流域では右岸側を中心に沖積地を形成している。

本遺跡は、小丸川中流域左岸の台地南側崖面に所在する。周辺の古墳を見ると、本遺跡北東の舌状台地上には6世紀後半代の先述の永山古墳が単独墳として、本遺跡北西の台地上には同じく6世紀後半代の山塚原古墳群が群集墳として所在しており、それぞれの被葬者の関係が注目される。本遺跡は、横穴墓としてこれらに統く時期の所産であり、この地域の古墳時代終末期の様相を知る上で重要である。同じく左岸の下流域を見てみると、本遺跡や永山古墳の立地する台地と小河川を隔ててすぐ東側の台地上には「川南古墳群」が、さらにその南東側の最も河口側に近い台地縁辺部一帯およびその眼下の沖積地には、合計約200基もの古墳からなる規模と三角縁神獣鏡を出土したこと有名な「持田古墳群」が分布している。また、横穴墓も、「持田地区」や「正祐寺地区」で小規模ながら群をして営まれている。

対する右岸では、段丘の浸食が進んでおり、小丘状や低く平坦面の少ない丘陵の多い地形が影響してか、左岸とは対照的に非常に小規模な古墳群が散在するという状況である。木城町内では、百合野地区・陣の内地区の低地に高塚古墳が、百合野地区北側の丘陵崖面には横穴墓がそれぞれ集中している。さらに下流域の横穴墓は、高鍋町の老瀬地区に一群があるのみである。



第3図 遺跡周辺地形図（1:5,000）

第Ⅲ章 横穴墓の調査

調査の概要

27号・60号の両横穴墓は、段丘の南面する崖面に位置する。いずれも段丘下位にある厚いシルト層に掘られており、このシルト層が西から東に向けて低く傾斜しているため、27号の東に位置する60号は27号より低い位置にある。27号の調査前の状態は、羨門部の周囲が崩落して本来の形状を失っており、羨門下部から前庭部にかけて土砂が堆積し、玄室床面よりも高くなっていた。また、羨門上部には比較的大きな樹根が広く深く入り込んでおり、これを除去すると崩落するのは自明のため、そのまま調査を行い、調査終了後も手を加えないことにした。

60号は、検出時に多量の土砂が前庭部から玄室内にかけて堆積しており、堆積状況を調べるためにセクションベルトを南北方向に設定して埋土を掘り下げていった。玄室内では、作業の都合上、上層の軟らかい土を除去した後に中央を通る十字のセクションとサブトレーナーを設定した。床面直上の埋土中には、玉類など小さい遺物が入っている可能性があるので、20cmメッシュを設定して各区画内の埋土を篩にかけて調査した。

以下、各横穴墓の遺構・遺物の検出状況について報告するが、事実関係と合わせ、それらの原因となつた事象など、事実に対する評価も若干交えて述べている。

27号横穴墓

27号横穴は、南に開口している。戦時中には防空壕として、戦後は一時住居として利用されていたという経緯があり、内部には、空間拡張のための若干の改変がみられた。調査開始時には、玄室内に天井部からの崩落土とみられるシルト層の土砂が堆積していたため、これを除去する作業から始めたが、まもなく生活用品などのゴミ類が現れた。このため、玄室内はかなり後世の攪乱を受けていると予想され、玄室内床面で検出された焼土や炭化物は、調査対象から除外した。しかし、精査を進めると、予想外に床面は薄い覆土に保護されて残存しており、奥壁側床面直上では剣1点が、右袖部では須恵器の坏類や土師器の碗、鉄鎌が集中して出土した。

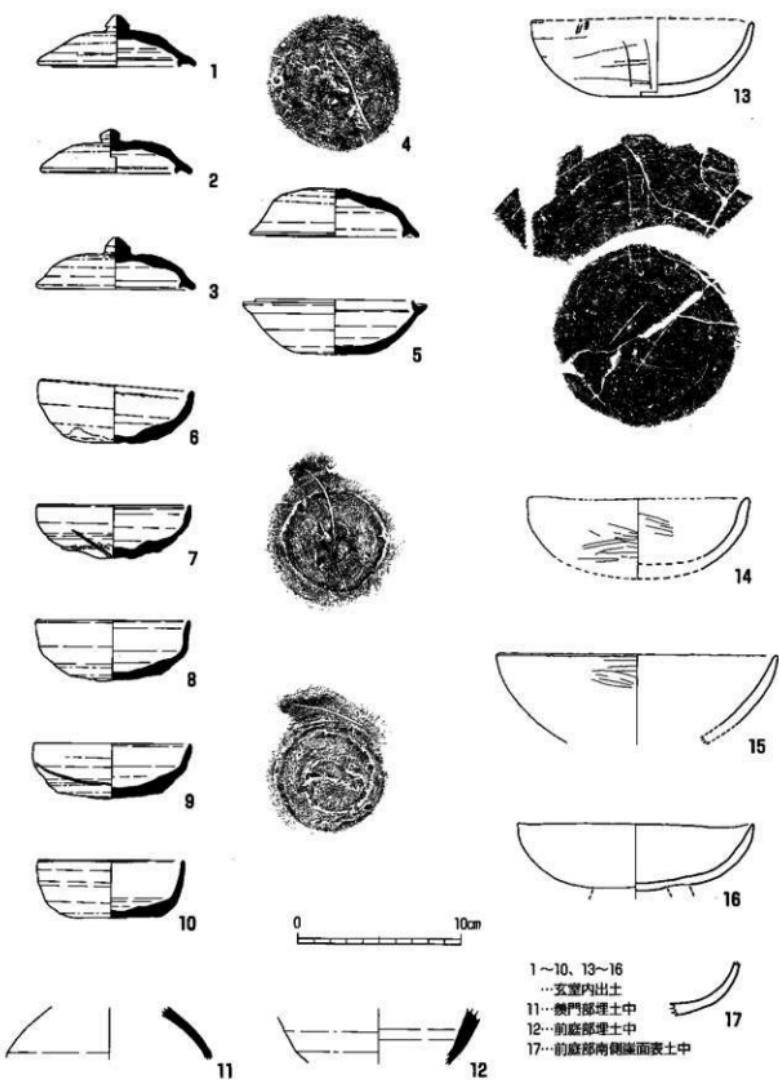
前庭部手前の崖面は、重機を用いて東半分の表土を除去し、前庭部では、土層の堆積状況を調査するためにセクションベルトを設定して掘り下げていった。前庭部手前の崖面表土からは、鉄刀1点（第6図25）と土師器碗片（第5図17）が出土した。

前庭部は予想に反して良好に残っており、羨門部下の閉塞板はめ込み用の溝と前庭部中央を通る排水溝が検出された。前庭部埋土下層には、焼土と炭の堆積が見られ、墓前で火を用いた祭祀が行われたことが窺える。土層の信用性については、埋土最下層の直上であることと土層の堆積状況に攪乱や新しい土などの混入が見られないことから、当時のものであると判断してよいと考えている。

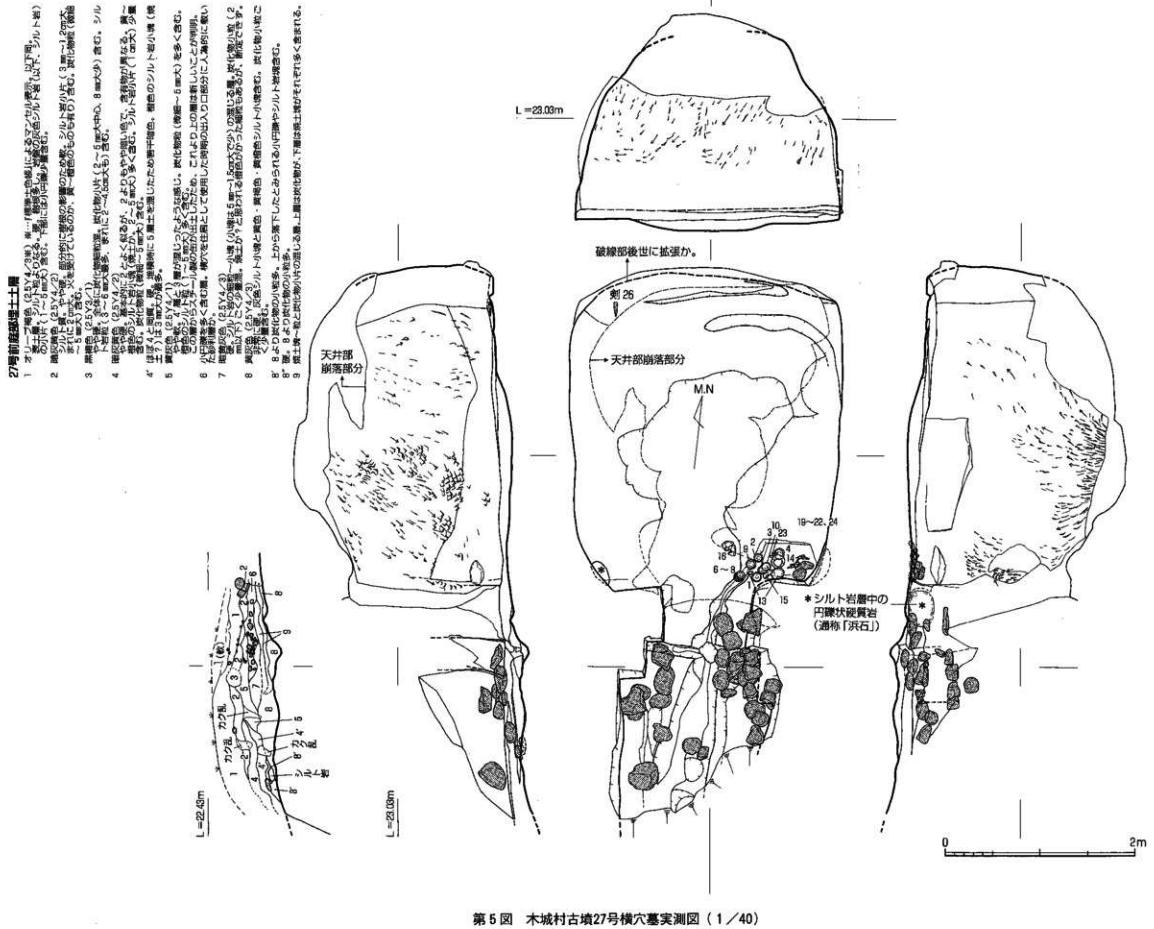
羨門部の形状は、上部が失われているのではっきりとわからないが、下部や良好に残っている60号の形状を見ると、前庭部との間に、「築り縁」または「基壇」を持つタイプであると推測される。

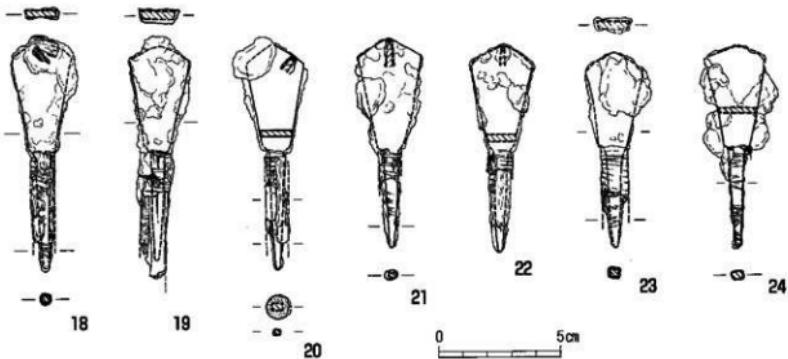
27号横穴墓の計測値は、玄室幅2.2~2.8m、玄室奥行き3.2m、羨道の長さ0.6m、前庭部の残存長1.8m、天井部までの高さは、天井部が崩落しているため不明だが、現況で約2mである。

玄室の出土遺物は、須恵器や土師器の土器類（第4図）と鉄器類（第6図）があり、その内容は、須恵器坏蓋完形4、須恵器坏蓋または身の完形1、須恵器坏身完形5、須恵器壺片2、土師器碗3、土



第4図 木城村古墳27号横穴墓出土土器実測図 (1/3)



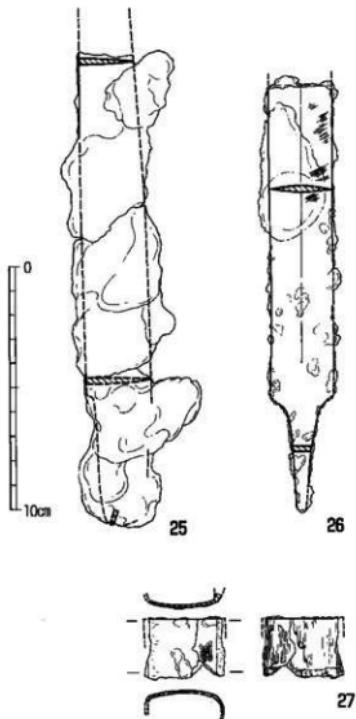


第1表 木城村古墳27号横穴墓出土鉄器計測表

計測値は鉄部の値。鉄織の矢柄部分は除外。単位はcm。

< >…現存の計測可能な箇所での最大値 () …推定値

番号	器種	全長	鐵身長	鐵身幅	鐵身厚	茎部長	茎部幅	備考
18	鉄織 (生痕 斧頭式)	9.4	4.6	2.4	0.3	4.8	0.6	矢柄の木質と樹皮巻き部が残存。茎部に巻いたひも状纏織の跡着あり。
19	*	8.7	4.3	2.5	0.4	5.4	(0.5)	矢柄の木質と樹皮巻き部が残存。
20	*	9.2	4.3	2.4	0.3	4.9	0.5	矢柄の木質と樹皮巻き部が残存。
21	*	8.5	4.6	2.6	0.4	3.9	0.5	矢柄の木質と樹皮巻き部が残存。茎部に巻いたひも状纏織の跡着あり。
22	*	8.4	4.2	2.6	0.3	3.9	0.5	矢柄の木質と樹皮巻き部が残存。
23	*	7.9	4.0	2.3	0.3	3.9	0.5	矢柄の木質と樹皮巻き部が残存。茎部に巻いたひも状纏織の跡着あり。
24	*	8.2	4.2	2.5	0.2	4.0	0.5	矢柄の木質と樹皮巻き部が残存。茎部に巻いたひも状纏織の跡着あり。



第6図 木城村古墳27号横穴墓出土鉄器実測図 (1/2)

師器高坏坏部1、土師器椀または高坏坏部片1、鉄錐7、刀1、剣1、刀または剣の装具(はばきか?)片1である。

遺物の出土状況を見ると、右袖部にまとまって出土しているものの、坏3点(6~8)を重ねて置いていたり、土器類の下から鉄錐が出土するなど、供獻された当初の位置からは移動しているようである。この遺物の移動については、遺物の覆土が堅固で乱れが無いことから、後世ではなく、追葬時に行われたと考えて差し支えないと思われる。

土器類は、「坏・椀」といった供獻土器が主体で、これ以外では、須恵器の「壺」がごく小片の状態で玄室外から出土している。須恵器坏は、口径が10cm程度の小型のものが多く、つまみの付く蓋3点(1~3)と身が5点(6~10)出土している。これに4のつまみの付かない蓋と5の身または蓋が加わる。しかし、数は多いものの、蓋と身が確実にセットとなるものは無い。土師器椀では、「梯状の線刻」のある13が注目される。

刀または剣の装具(27)は、玄室内から出土した剣(26)または前庭部下の崖面表土中に発見された刀(25)のどちらに装着するのにも適當な大きさであるが、装着孔の涙形に近い形状から刀のものである可能性がより高い。刀の時期に注意しなければならないが、元来は刀身と装具が同一のものであり、刀身のみ後世に玄室外に廃棄されたとも考えられる。

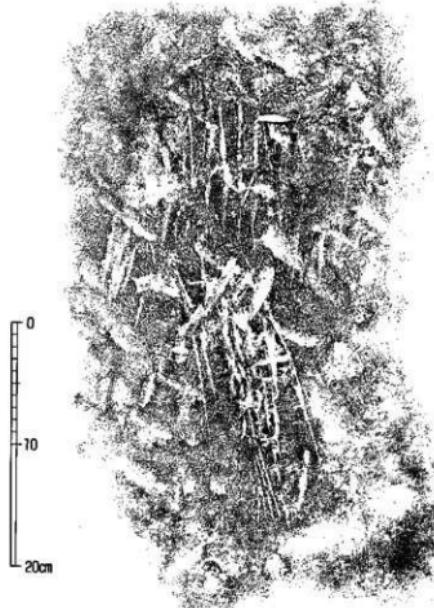
剣(26)は、全体を鏽に覆われているが、剥落した鏽層の劍身側の面に絹と思われる細かい織り目の布目痕が確認された。これは劍身表裏どちらの面にもあるため、副葬時に布で巻かれていたことが想像される。

遺物それぞれの所見や計測値については、第1・2表を参照されたい。

60号横穴墓

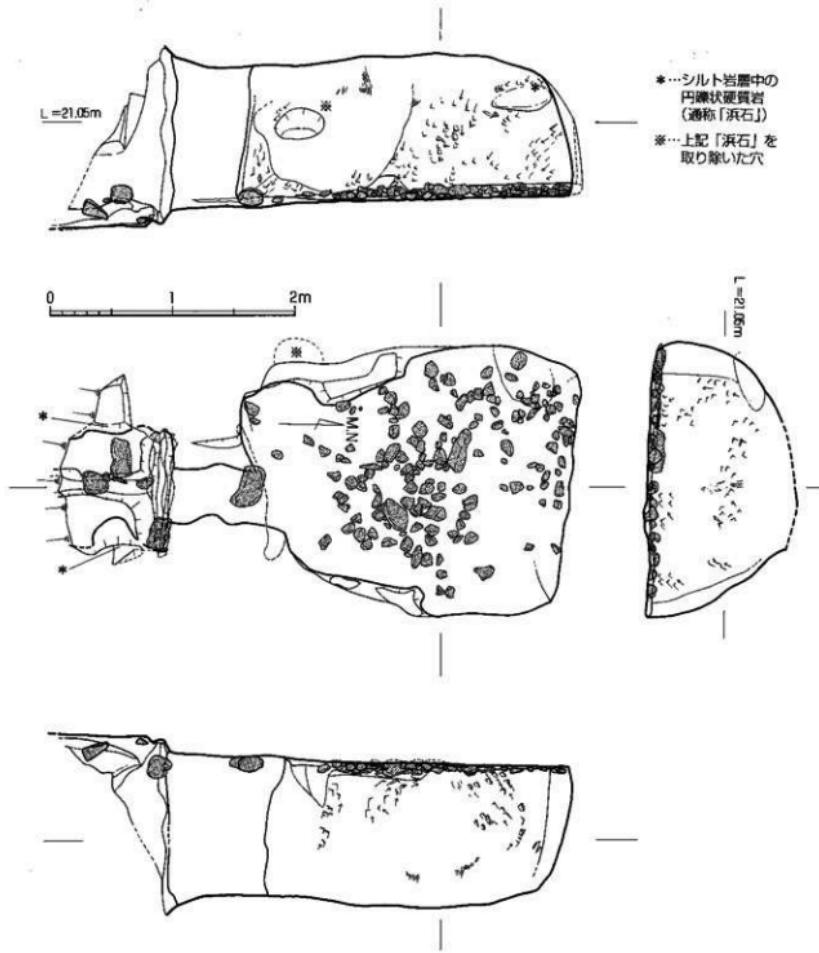
60号横穴墓は、法面工事中に発見されたため、羨門部の手前上部をすでに失っていた。検出面で60号横穴墓では、玄室内の遺体を置く屍床に敷石が検出されたが、その散乱状況から開口後の土砂の侵入などによって、かなり原位置から動いていると思われる。

玄室周壁を観察すると、床面から80cm、天井から30cmのレベルで冠水した痕跡があるため、玄室内への水の侵入が相当量あったことがうかがえる。また、冠水した時期が数度あったことは、玄室埋土の土層断面の状況からも看取できた。冠水部分の周壁は、薄い泥にコーティングされたような状況であったが、これを丁寧に除去していくと、奥壁東寄りの位置で線刻画(第7図)が発見された。



第7図 木城村古墳60号横穴墓奥壁縦線刻画(1/4)

(土層断面の実測および所見についての記録は、図化時に一部
不整合箇所が確認されたため、ここでは掲載していない。)



第8図 木城村古墳60号横穴墓実測図 (1/40)

縱方向および斜め方向の条線で構成された図である。

遺構の計測値は、玄室幅2.2m、玄室奥行き2.4m、羨道の長さ0.6m、前庭部の残存長0.9m、天井部までの高さ1.2mである。羨門部は非常によく残っており、飾り縁風の丁寧な掘り込みがなされている。その手前の形状がどのようなものであったかについては、掘削によって失われているため明らかでないが、左右には基壇状の掘り込みが検出されている。

遺物は、前庭部下部の埋土から土器小片2点が出土したのみであったが、この他、遺物と判断し難い石器状の岩片が前庭部と玄室内で1点ずつ出土している。(図版6、長さ13cm前後)

第IV章　まとめ

木城村古墳27号・60号の両横穴墓の調査は、木城町内において、本格的な横穴墓の発掘調査としては初めての例となった。調査の結果、横穴墓の形態が確認されたとともに、27号では、出土した須恵器をもとに横穴墓の時期が明らかになった。

横穴墓の形態は、両者ともドーム形で羨道が0.6mと短い点が共通しているが、玄室平面形は、27号が方形、60号は不定形である。羨門部の形態は、27号では崩落のため不明だが、60号ではよく形状を残しており、正面形はやや台形状の長方形である。両者とも羨門下部には閉塞板はめ込み用の溝と排水溝を持つ。また、前庭部の円礫の出土状況からは、閉塞板の固定に円礫を用いていたことが推測される。墓道については、原地形を復元推定した上で考えるべきだが、27号と60号との距離は約8mで高低差が約3mあり、墓道がそれぞれ独立していたのか否かが興味深い。

横穴墓の時期については、27号では、須恵器坏のうち、1~3の摘みの付く蓋と6~12の小型の身は、須恵器編年上「隼上りⅢ」型式に相当し、7世紀第二四半期~中葉の時期である。また、4・5の蓋または身はこれらよりやや口径が大きく、7世紀第一四半期に相当すると思われる。したがって、築造年代は、より古い「隼上りⅡ」型式の時期と理解される。60号では、年代を決定できる遺物の出土をみなかったが、新しい様相を示す不定型な玄室プランから、27号に続く7世紀後半頃ではないかと推測される。

周辺の古墳群との関係をみると、本遺跡の西側の台地上には山塚原古墳群が所在する。1983年に調査された円墳14基のうちの須恵器が出土した7基について、藤本貴仁氏は須恵器形態からの築造年代を検討しており、このうち最も時代の下る年代は「隼上りⅡ」型式の年代という。これは27号の築造時期と重なり、同一の集團あるいはその一部が、山塚原地区の群集墳の造営から、本遺跡のある岸立地区の横穴墓群の造営へ移行したことをうかがわせる。

参考文献

- 藤本貴仁「宮崎平野部の群集墳」『宮崎考古』第16号 宮崎考古学会 1998年
- 増田一裕「飛鳥時代須恵器の編年にかかる追試作業」『土曜考古』第19号 土曜考古学研究会 1995年
- 大分県教育委員会「上ノ原横穴墓群Ⅰ」1989年 ほか

第2表 木城村古墳27号横穴墓 出土土器觀察表

番号	種別	器種	部位	法量(cm)			成形・調整の特徴		色調	胎土	焼成	備考
				口径	底径	器高	外 面	内 面				
1	須恵器	壺蓋	完形	7.7		3.2	つまみ部ナデ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	青灰色	精良	良好	
2	須恵器	壺蓋	完形	7.6		2.7	つまみ部ナデ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	灰色	精良	良好	
3	須恵器	壺蓋	完形	7.9		3.2	つまみ部ナデ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	灰色	精良	良好	
4	須恵器	壺蓋	完形	8.4		3.0	回転ナデ 回転ヘラケズリ 回転ヘラ切離し	回転ナデ 仕上げナデ	青灰色	精良	良好	ヘラ記号あり
5	須恵器	壺身蓋?	口縁～底部	推定	推定	推定	回転ナデ	回転ナデ 仕上げナデ	青灰色	精良	良好	
6	須恵器	壺身	完形	9.3	6.0	3.9	回転ナデ 回転ヘラケズリ 回転ヘラ切離し	回転ナデ 仕上げナデ	灰色	精良	良好	
7	須恵器	壺身	完形	9.3	5.9	3.3	回転ナデ 回転ヘラケズリ 回転ヘラ切離し	回転ナデ 仕上げナデ	灰白色	精良	良好	ヘラ記号あり
8	須恵器	壺身	完形	9.3	5.7	3.2	回転ナデ 回転ヘラケズリ 回転ヘラ切離し	回転ナデ 仕上げナデ	綠灰色	精良	良好	
9	須恵器	壺身	完形	9.6	6.4	3.4	回転ナデ 回転ヘラケズリ 回転ヘラ切離し	回転ナデ 仕上げナデ	青灰色	精良	良好	ヘラ記号あり
10	須恵器	壺身	完形	8.9	3.5	5.5	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ 仕上げナデ	灰色	精良	良好	
11	須恵器	壺	肩部				ナデ	回転ナデ	灰色	精良 白色岩片3ミリ程度を含む	良好	外面に自然釉
12	須恵器	壺	胸部 底部付近				回転ナデ 回転ケズリ	回転ナデ	灰色	精良 白色岩片2ミリ程度を含む	良好	
13	土師器	椀	口縁～底部	13.5		4.8	ナデ	ナデ	淡橙色	精良 細砂粒含む	やや不良(軟)	内外風化著しい赤彩わざかに残存線刻文あり
14	土師器	椀	口縁～胴部	13.4		推定 5.0	強いナデ ヨコヘラミガキ	ナデ	橙色	精良	良好	内外面やや風化赤彩残存(特に外面)
15	土師器	椀	口縁～胴部	17.1			ヨコヘラミガキ 斜めヘラミガキ	ナデ?	淡橙色	精良	やや良好	内外風化著しい赤彩わざかに残存
16	土師器	高杯	壺部				ナデ?	ナデ	橙色	精良だが粗砂わざかに含む	やや不良(軟)	内外面風化著しい
17	土師器	椀 または 高杯	胴部				ナデ?	ナデ	橙色	白色の岩片2ミリ程度を含む	やや不良	内外面風化著しい

図版1

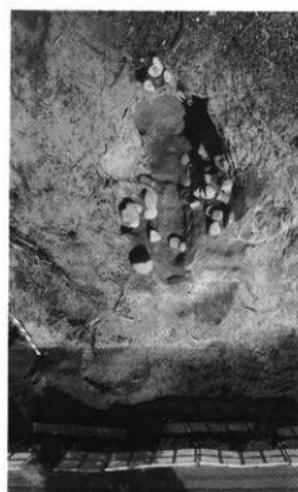


← 航空写真（南東から）
中央右下崖面に
木城村古墳27号横穴墓

27号
↓ 調査前の状況



27号 近景



27号 上空より

図版2



図版3



27号 玄室右袖部 遺物出土時の状況



27号 玄室（調査終了時 瑞門から）



27号 玄室右袖部 遺物出土状況



27号 玄室天井部（調査終了時）



27号 調査終了時の状況



27号 玄室右袖部～瑞門部（調査終了時）



27号 瑞門部左側掘り込み部分



27号 玄室左袖部～瑞門部（調査終了時）

図版4



60号 発見時の状況（左上は27号）

60号 →
羨門部検出状況
および葬道部埋土
半截状況



60号 玄室床面上埋土をメッシュごとに取上げる作業

60号 →
羨門部および
前庭部完掘状況



60号 玄室内埋土と砾の状況

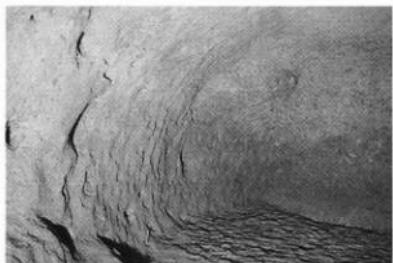
60号 →
奥壁の線刻画



60号 玄室内砾出土状況（羨門から）



図版 5



60号 玄室左半部



60号 奥壁（中央に線刻画）



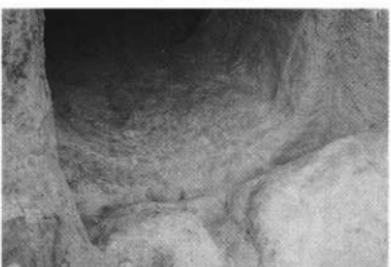
60号 玄門部東壁の工具痕



60号 玄室左袖部



60号 羨門および前庭部（完掘後）



60号 羨門下部の閉塞板用溝と排水溝



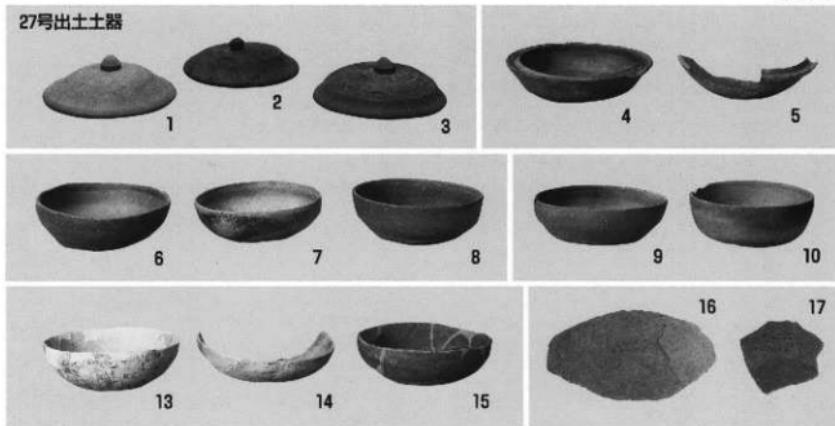
法面保護工事作業状況（金網張り）



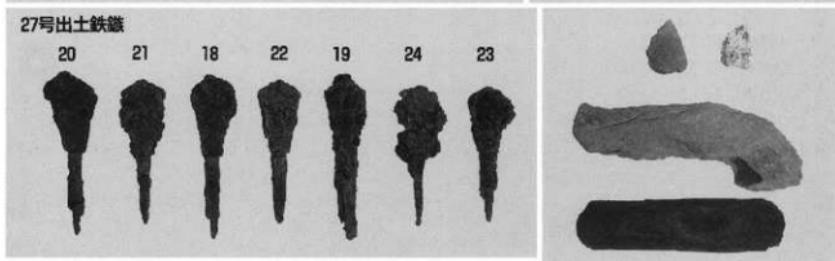
法面保護工事終了時の状況（東から）

図版6

27号出土土器



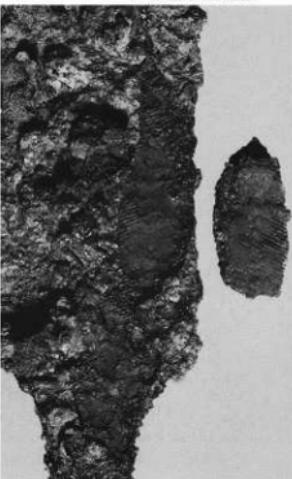
27号出土鐵鎌



60号出土遺物 上：前庭部溝土出土土器片
中：前庭部出土石器？
下：玄室內出土石器？



剣(26) →
鋳層下に残る
布目痕
(鋳層の1片を
剥がした状態)



27号出土刀・剣・装具片

報告書抄録

フリガナ	キジョウソンコフン 27ゴウ・60ゴウ ヨコアナボ					
書名	木城村古墳27号・60号横穴墓					
副書名	県道都農綾線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書					
シリーズ番号	第31集					
編集者名	竹井真知子					
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター					
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地					
発行年月日	2000年11月30日					
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
木城村古墳 27号・60号 横穴墓	宮崎県兒湯郡 木城町 大字高城 字 岸立 4301-10番地	32°09'45" 付近	131°27'55" 付近	1995年 1月31日 ～ 1995年 3月20日	100m ²	道路改良
遺跡の種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
墳墓	古墳時代 (7世紀代)	横穴墓	27号横穴墓出土遺物 須恵器: 坏11、壺片2 土師器: 梶3、高坏1 鉄器: 鐵7、刀1、劍1	27号は既開口の横穴。 60号は今回の調査で 発見された。玄室奥 壁に線刻画有り。		

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第31集

木城村古墳 27号・60号横穴墓

発行年月日 平成12年11月30日

編集発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
TEL0985-36-1171

印 刷 濱印刷センタークロダ

〒880-0022 宮崎市大橋2丁目175
TEL0985-24-4351